

閃光戦隊ジュエルスターズ

④ジュエル・ルビー戦闘不能!

秋津 透



富士見ファンタジア文庫

イラスト 新田真子



富士見ファンタジア文庫

せんこうせんたい

閃光戦隊ジュエルスターズ

④ジュエル・ルビー^{せんとうふのう}戦闘不能！

平成4年5月25日 初版発行

著者——^{あきつ とおる}秋津 透

発行者——中井茂雄

発行所——富士見書房

〒102 東京都千代田区富士見1-12-14

電話 03(3261)5375(代表)

振替 東京7-86044

印刷所——新興印刷

製本所——大谷製本

落丁乱丁本はおとりかえいたします

定価はカバーに明記してあります

©1992 Fujimishobo, Printed in Japan

ISBN4-8291-2439-3 C0193

©1992 Tooru Akitsu, Studio HENSHUBU

江苏工业学院图书馆

藏 书 章

閃光戦隊ジュエルメタース

④ジュエル・ルビー戦闘不能！

139

秋津 透



富士見ファンタジア文庫

15-4

・ 本文イラスト 新田真子

目次

1	甲州屋一族の秘境 かくれきと	5
2	学校食堂に潜む罠 ひそわな	55
3	ジュエル・ルビー絶体絶命！ ぜつたいぜつめい	103
4	暁の奪回作戦 オペレーション・エーオース	161
	エピローグ	224
	あとがき	233

1 甲州屋一族の秘境かくれざと

日本に残された最後の人外魔境じんがいまきようにうごめく、謎なぞのイタリアンパテレン忍者の末裔まつえいを見た！ 秘境かくれざとに籠こもった甲州屋一族の、知られざる驚異と戦慄せんりつに満ちた生活習慣のすべてが、今、晴天白日せいてんはくじつの下もとに晒さらされる！ 前人未到ぜんじんみとう、空前絶後の恐怖、悪夢あくむの甲州屋秘境鍋なべと、地獄じごくの甲州屋秘境風呂、そして、神秘と怪奇かいきの甲州屋秘境大祭司アーチプリーストに、あなたの神経は耐えられるか!?

「ひーはーふーはー、ひひははふふはは、あー、くーたびれた、ざーんすっ」

半分草おおで覆おおわれた細い山道の、傍に転がっている大きな岩に片手をかけ、IKAIYO日本支部財務担当幹部パパゲツチイ甲州屋は、心底しんぞこ疲れ果てた表情で、はあはあと荒い息を吐く。

「まーったく、なーんでまたこんなど辺鄙へんぴな場所に、わーざわざ先祖代々住みついている

彼^{ババグッチイ おおあわ}は大慌^はてで羽織^{はおり}の内懐^{ふところ}に手^てを突^つつ込み、妻^{つま}が持^もたせてくれた護身用^{ディフェンス}のカプセルを、月の輪熊^{りんぐ}に向けてぱかつと開^ひく。

「これでも食^くらえつ、ざーんすつ！」

「ぐおーっ！」

「ばおーんっ！」

カプセルが開くと、中からアルラウネ・グアル・パニザス・甲州屋会心^{クリイチャイ}の創造物^{クリエーション}、高性能^{ハイパフォーマンス}バイオ植物兵器^{ウエポン}『ぼちまりも信玄^{しんげん}くんA R 4改^{エイアル}（麻酔^{バライズベノム}花粉噴射^{つる}蔓付^つき陸戦専用型^{陸戦専用型}）横^{よこ}槍^{やり}八百十七号^{ラムダ}λ・個体番号26—H^{エイチ}（携帯^{ハンディ}用加工^{加工}済^済）』が転がり出^でる。空気中の水分^{水分}を急速^{急速}に吸収^{吸収}して、たちまち直径五メートルの大きさに膨張^{ふくれ}したバイオまりもは、高らかに雄叫^{おたけ}びを上げて熊に立ち向^{むか}かう。

「ばおーんっ！ ばおおーんっ！ ばおばおばおーんっ！」

「ぐぐぐ、ぐお？」

いきなり目の前に出現した巨大な緑の球体^{たま}に、さすがの甲州熊も当惑^{どうわく}したらしく、低く唸^{うな}りながら立ち止まった。そこへすかさずバイオまりもが、蔓の先端から黄色い花粉^{ベノム}を勢よく噴射^{ふきつけ}する。

「ばおーんっ！ ばおおーんっ！ ばおばおばおーんっ！」

「ぐ、ぐ、ぐぐぐ、ぐーっ……」

強力な麻酔効果のある花粉をまともに吹きつけられた熊は、呻くような声を出しながらふらふらつとよろめき、やがて、どつてーんとひっくり返って動かなくなつた。ふう、と安堵の溜息をつき、甲州屋は手ぬぐいを取り出し額の汗をぬぐう。

「やれやれ、助かつたぞ。やっぱり、困つた時には『信玄くん』ぞんすね」

ぱおーんつ、と勝利の雄叫びを上げるバイオマリもを見やつて、甲州屋は、ぱつと日の丸扇子を開いて満足の意を表した。そして、開いたカプセルの脇についている指令装置を「収納」の位置に合わせる。これで、バイオマリもは吸収した水分を再放出し、カプセルの中に戻つて来るはずだ。

ところが、バイオマリもが水分を放出し始めたあたりで、不意に、強烈な眩暈が甲州屋を襲う。し、しまった、麻酔花粉を少し吸い込んだぞんすか、と、気がついた時にはもう遅い。足元がぐらぐらと揺れたかと思うと、天地が派手にでんぐり返り、あつと言う間に甲州屋は、熊と同様、ずつてんどうと昏倒した。

犬並みの知能を備えたバイオマリもは主人の異変に気がついたようだったが、「収納」の指令電波が出つ放しになっている以上、どうにもならない。ぱおーんと哀しげに鳴きながら、水分を放出して身体を縮め、ころころとカプセルの中に転がり込む。そして、カプ

セルの蓋が自動的にぴたりと閉じると、鳥も通わぬ甲州の山奥、周囲に動く存在は何一つとしてなくなった。あとは、例によって甲州屋が喚く壮絶（？）な寝言が、深山に響くばかりである。

「わーっ！ わわーっ！ わわわーっ！ くく、熊っ！ 熊熊っ！ 熊ざんすっ！ おつかねーざんすっ！！ わーっ！ わわーっ！ わわわーっ！ くく、熊っ！ 熊熊っ！ 熊ざんすっ！！ おつかねーざんすっ！！ わーっ！ わわわーっ！ くく、熊っ！ 熊熊っ！ 熊ざんすーっ！ おつかねーざんすっ！！ わーっ！ わわーっ！ わわわーっ！ くく、熊っ！ 熊熊っ！ 熊ざんすーっ！ おつかねーざんすっ！！

「あ、気がつかれたようざんすね」

はっと意識を取り戻した時、パパゲツチイ甲州屋が最初に認識したものは、何と、上から自分を覗き込んでいる自分自身の顔だった。いや、これは自分ではないざんす、鏡に映したように自分にそっくりな男ざんす、と、甲州屋が気がついた瞬間、その男がにんまりと笑って訊ねた。

「御気分はいかがざんすか？」

「ま、まあ、どうにか大丈夫のようざんす」

返答しながら甲州屋は掛布団を押し上げ、身体を起こす。周囲を見ると、彼が寝かされていたのは、途方もなく時代がかった雰囲気の畳敷の座敷だった。金泥で唐獅子の絵が描いてある襖も、黒光りしている柱や梁、天井板も、富士山の掛け軸のかかった床の間も、まるで時代劇に出て来る御屋敷の一室のような印象を与える。

「どうやらお世話をかけたようですね。ありがとうございます、御礼を言うんです」

「いえいえ、とにかく御無事で何よりなんです」

とりあえず頭を下げる甲州屋に、正座した男は大仰に礼を返すと、いささかわざとらしい口調で訊ねた。

「ところで、失礼ながら、貴公は甲州屋一族の方ではないんですか？」

「ぎよえっ？ ど、どうして、それを？」

相手に劣らずわざとらしい態度で、甲州屋は大仰に驚いて見せる。すると男は、ふっと笑って説明を始めた。

「簡単なんです。天下に寝言癖のある人間は数多いんですが、あそこまで壮絶な寝言を延々と喚きたてる者は、拙者の知る限りでは甲州屋一族しかいないんです。それに、一般人が道なき道をここまで登って来る事は滅多にないですし、貴公の容貌や言葉づかいは甲州屋一族の典型なんです。だから拙者は、貴公が同族だろうと見当をつけたんですが、

「やっぱり決定的だったのは寝言さんすね」

「なるほど、それはまさしく炯眼きやうがんさんす。しかし、今、同族とおつしやったさんすが、そうすると、もしかして貴公も甲州屋一族という事さんすか？」

傍はたから見れば、今更いまさらもしかしても何も無いものだが、パパゲツチイ甲州屋は目いっぱいわざとらしい調子で訊ねる。すると男は、再びにまっと笑って軽く頭を下げた。

「拙者やつがれは、通称『甲州屋一族の秘境かくれざと』甲州狐谷きつねだにに住む甲州屋一族嫡流ちやくりゅうの一員、ジョルジ甲州屋と申す者さんす」

「これはどうも、御丁寧ごていねいに。拙者それがしはパパゲツチイ甲州屋。横槍よこやりの出身さんす」

そう言つて、パパゲツチイは深々と礼を返す。どうやら気絶している間に、うまい具合に甲州屋一族の秘境かくれざとに運び込まれたらしい。これぞまさしく天の配剤、どうやら幸運が巡めぐつて来てるさんす、と、勝手に判断した甲州屋パパゲツチイは、いきなり单刀直入ストリートに男に訊ねた。

「ところで、ジョルジ殿。拙者それがしがこの地を訪れた目的は、甲州屋一族に伝わる崑崙八卦拳こんろんはつけん封じの秘策を知るためなんさんすよ。もしかして、御存知ないさんすか？」

「崑崙八卦拳封じの秘策、さんすか？」

甲州屋パパゲツチイの質問に、男ジョルジはわざとらしくげじげじ眉まゆを寄せて首を傾げる。

「さて、聞いた事があるような、ないような……。何かきっかけがあれば、思い出せるか

も知れないざんすが……」

「はいはい、心得ているざんす」

甲州屋一族に情報を提供してもらおうと思ったら、どう転んでも無報酬で済むわけがない。彼 はこそごと懐を探り、白い紙で包まれた平たい箱を取り出した。

「どなたにも喜んでいただける、山吹色の菓子ざんす」

「ほほう、これはこれは」

にまつと嬉しそーに笑いを浮かべ、男は包みを受け取る。

「拝見させていただいて、よろしいざんすか？」

「はい、どうぞどうぞ」

甲州屋が承諾するより早く、男は慣れた手つきでさっさと包装紙を開く。すると、中から『甲州横槍銘菓 山吹色の菓子』と書かれた箱が現れた。箱を開くと、中には何の変哲もない山吹色のまんじゅうがぎっしり詰まっている。

「なんざんす、これは？」

「だから、御覧の通り、『山吹色の菓子』ざんす」

平然とした表情で答える甲州屋に、男は非難するような視線を向ける。

「パパゲツチイ殿、これはいささか贅癡ものの冗談ざんすね」



「何が聾瘡ものぞんすか。『山吹色の菓子』は、山吹色の菓子。拙者、これっぽっちも嘘は言っていないぞんすよ」

ますます平然と、堂々と、ほとんど胸を張らんばかりの調子で答えた甲州屋は、そこでききなり、にまっと笑いを浮かべる。

「これぞ甲州屋忍法、『嘘は言っていないぞんすよ・山吹色の菓子』の秘技ぞんす。しかし、拙者の言葉を簡単に信用せず、中身を開いて実態を確認するあたりは、さすがは甲州屋の秘境に潜む嫡流の一員。あっぱれな用心深さぞんすね」

「同族相手には、当然の配慮ぞんすよ」

そう言つて男は、ふっと軽く笑う。本人たちはまったく気にしていないようだが、傍から見てみると、同じ容貌の甲州屋が二人、こういう交渉をしている光景には、かなり異様な雰囲気がある。

「さて、それはとにかく、崑崙八卦拳封じの秘策について、何か知っているなら教えてほしいぞんす」

あらためていくらかの情報料を渡し、甲州屋は男に質問する。渡された金額をその場で確認した上で、男は淡々とした口調で答えた。

「崑崙八卦拳封じの秘策とやらについて、拙者は聞いた事がないぞんすが、大祭司様な

らきつと御存知に違いないぞんす。あの方は、甲州屋一族の伝承ならば、すべて記憶しておられるはずぞんすから」

「ほほう、そういう御方がいらっしやるぞんすか」

アチリス
大祭司様なんて代物が存在するとは、さすがは甲州屋一族の秘境ぞんすね、と、パパゲツチイは軽く感服の唸りを発した。これはひよつとしてひよつとすると、多少は期待できるかも知れないぞんす。

実際、正直なところ、この訪問で崑崙八卦拳封じの秘策が得られるかどうかについて、彼はそれほど大きな期待は抱いていなかった。何しろ、唯一の手掛かりである重鎮バツポローチエ甲州屋の記憶が、本当にドーしよもないほど曖昧なのである。

先日、重鎮の率いる横槍甲州屋忍群は、閃光戦隊のルビー、サファイア、ダイヤモンドの三人の戦士と闘った。その結果は、もちろん完膚無きまでの敗北だったわけだが、敵の一人ジュエル・ルビーが、超非常識拳法、崑崙八卦拳の拳士だと聞いたとたん、甲州屋一族には、確か、その拳法を封じる秘策が伝わっていたはずぞんす、と、重鎮が喚き出したのである。しかし、その秘策が具体的にどんな策で、どうして甲州屋一族に伝えられているのか、などの肝心な点については、甲州屋が（少なくとも、彼の感覚としては）多額の情報を積んで聞き出そうとしたにも関わらず、重鎮は何一つ知らなかった。ただ